

稲・野菜二毛作地域に適する 早生・多収の水稲新品種「歓喜の風」 —良品質・良食味米として関東以西での栽培に期待—

ポイント

- ・ 多収で玄米品質が優れる早生の水稲新品種「歓喜の風」を育成しました。
- ・ 「キヌヒカリ」より、10%多収で、高温でも玄米の外観品質の低下が少なく、炊飯米の食味が優れます。
- ・ 早生のため、関東以西で冬春野菜の後作として栽培できます。

概要

1. 農研機構九州沖縄農業研究センターは、関東以西の稲・野菜二毛作¹⁾地帯で広く栽培されている「キヌヒカリ」並みの早生で、「キヌヒカリ」より約10%多収の水稲新品種「歓喜の風」を育成しました。
2. 玄米の外観品質は「キヌヒカリ」よりやや優れ、炊飯米の食味は「キヌヒカリ」と同等かやや優れています。
3. 温暖化により高温時の「キヌヒカリ」の品質低下が問題となっている関東以西の稲・野菜二毛作地帯において、冬春野菜の後作としても栽培が可能です。

<関連情報>

予算：運営費交付金、農林水産省委託プロジェクト研究「広域・大規模生産に対応する業務・加工用作物品種の開発」

品種登録出願番号：「第32150号」（平成29年6月1日出願）

問い合わせ先

研究推進責任者：農研機構九州沖縄農業研究センター 所長 栗原 光規

研究担当者：同 水田作研究領域 稲育種グループ 片岡 知守、竹内 善信

TEL 0942-52-0647

広報担当者：同 企画部産学連携室長 樽本 祐助 TEL 096-242-7682 FAX 096-242-7543

プレス用 e-mail : q_info@ml.affrc.go.jp

本資料は筑波研究学園都市記者会、農政クラブ、農林記者会、農業技術クラブ、九州各県の県政記者クラブ、日本農業新聞九州支所に配付しています。

※農研機構(のうけんきこう)は、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネーム(通称)です。新聞、TV等の報道でも当機構の名称としては「農研機構」のご使用をお願い申し上げます。

新品種育成の背景・経緯

関東以西の稲・野菜二毛作地帯は早生の主食用米の生産が多い地域のひとつです。そこでは冬春野菜作の後に栽培できる早生品種として「キヌヒカリ」が広く栽培されていますが、近年の温暖化に伴い高温時の玄米の外観品質の低下（白未熟粒の増加など）が問題となっています。

このため、高温に強く、冬春野菜の後作にも適する早生で、良質・多収の水稻新品種の育成に取り組みました。

新品種「歓喜の風」の特徴

1. 耐倒伏性の「ふくいずみ」と、極早生で多収かつ玄米外観品質が優れる「越南 208 号（後の「あきさかり）」）を交配し、「歓喜の風」を育成しました。
2. 出穂期は「キヌヒカリ」より 2 日、成熟期は 5 日遅い早生の品種です（表 1、写真 1）。関東以西から西日本にかけて広く栽培できます。
3. 稈長は「キヌヒカリ」と同程度に短く、比較的倒伏しにくいいため、野菜の後作など肥料の残効があるような一定程度の多肥条件でも栽培が可能です。精玄米収量は、「キヌヒカリ」に対して標準施肥栽培では 9%、多肥栽培では 14% 多収です。
4. 玄米の外観品質は「キヌヒカリ」よりやや優れています（表 1）。高温であった 2016 年の「歓喜の風」の玄米品質は「キヌヒカリ」より良好でした（写真 2）。
5. 炊飯米の食味は「キヌヒカリ」と同等かやや優れ、「コシヒカリ」や「ヒノヒカリ」に近い良食味です（表 1）。
6. 現在、普及を見込む静岡県南部（森町）では出穂期は「キヌヒカリ」より数日遅い程度で、レタスなどの野菜との二毛作が可能です。

今後の予定・期待

関東以西において多収の早生品種として広く栽培できるほか、複合経営における二毛作の冬春野菜の後作としても利用可能です。温暖化の影響で高温時の「キヌヒカリ」の玄米外観品質低下が問題となっている地域では、「歓喜の風」を栽培することにより、収量増加に加え、玄米品質の向上が期待できます。静岡県では、良質・安定多収の良食味米として、現在、約 500ha の普及を見込んでいます。

品種の名前の由来

普及先の農家が待望の品種ができたことに歓喜する姿を想起して品種名を「歓喜の風」としました。

種子入手先に関するお問い合わせ先

農研機構九州沖縄農業研究センター 企画部 産学連携室 産学連携チーム
TEL 096-242-7513

利用許諾契約に関するお問い合わせ

農研機構連携広報部 連携広報部 知的財産課 種苗チーム
TEL 029-838-7390 FAX 029-838-8905

用語の解説

1) 二毛作

温暖な地域において、ひとつの耕地で 1 年に 2 種類の農作物を栽培する体系をいい、ここでは夏作に稲を、冬作にレタスなどの野菜を栽培する体系を想定しています。一般に冬春の野菜作では多量に肥料を施用するため、肥料が残効しやすく、後作の稲が倒れやすくなったり、食味が低下したりする場合があります。

参考図

表1 「歓喜の風」の栽培特性

栽培条件	品種名	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	倒伏 (0~5)	玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	千粒重 (g)	玄米 外観 品質 (1~9)	玄米 蛋白質 含有率 (%)	食味 (-5~5)
標肥栽培	歓喜の風	8.15	9.25	82	20.4	338	0.3	55.9	109	22.8	5.4	6.1	-0.16
	キヌヒカリ	8.13	9.20	79	18.4	315	0.1	51.1	100	22.3	6.0	6.6	-0.33
多肥栽培	歓喜の風	8.15	9.29	85	20.5	364	1.2	58.3	114	23.0	5.7	6.4	-0.31
	キヌヒカリ	8.14	9.23	81	18.6	345	0.5	51.2	100	22.6	6.2	6.9	-0.63

九州沖縄農業研究センター筑後研究拠点（福岡県筑後市）における 2009～2016 年の栽培試験の結果。標肥栽培は標準的な施肥を示しチッソ成分 0.80kg/a、多肥栽培は 同 0.95～1.20kg/a。倒伏は、0: 倒伏なし～5: 完全倒伏 の 6 段階評価。玄米外観品質は、1: 良～9: 不良 の 9 段階評価。玄米蛋白質含有率は、水分 15%として換算した値。食味は 2009～2013 年は「コシヒカリ」を基準、2014～2016 年は「ヒノヒカリ」を基準とし、官能評価で -5: 劣る～5: 優る の 11 段階評価。



写真1 「歓喜の風」の草姿

標肥栽培した「歓喜の風」（右の4列）と「キヌヒカリ」（左の4列）。福岡県筑後市。2016年9月17日撮影。



写真2 「歓喜の風」の玄米

「歓喜の風」(右)と「キヌヒカリ」(左)。2016年産米。2017年1月24日撮影。2016年の出穂後20日間の平均気温は28.7℃と高温で、「キヌヒカリ」に白未熟(赤丸)粒の顕著な発生が認められたが「歓喜の風」では軽微。